

## 〔研究ノート〕

# 流通科学部2014年度入学生のプレイスメント・テスト報告

## Placement test report of the 2014 student

柳瀬 尚司<sup>1)</sup>・居村 俊子<sup>1)</sup>・山口 尚子<sup>1)</sup>  
亀井 憲治<sup>1)</sup>・渡邊 麗子<sup>1)</sup>・木下 和也<sup>2)</sup>  
福沢 健<sup>2)</sup>・池田 祐子<sup>2)</sup>・音成 陽子<sup>2)</sup>

### 1. はじめに

中村学園大学流通科学部では、1年時4月に国語・数学・英語の基礎学力の確認を目的として全員を対象にプレイスメント・テスト（以下、テスト）を実施している。中学・高校レベルであるテストの結果により基礎力が不十分と思われる学生には、基礎教育センターによるサポート講座や個別指導を実施している。さらに、2年時4月に再度テスト（同レベルで7割～8割は同一問題）を実施し、両テストを受けた学生の基礎学力の維持・向上の度合いや指導状況の変化をみている。本稿はその結果を報告するとともに、記録として残しておくことを目的とするものである。

### 2. 実施状況

2014年度入学（以下14B）の学生を対象に国語・数学・英語（各100点満点、各20分）のテストを2014年4月と2015年4月に実施した。1年時は必修科目のアカデミックリテラシーにおいて、3教科248名が受験した。2年時は2015年4月に選択科目のベーシックスタディⅠ（日本語）において、国語155名、数学158名、英語159名が受験した。

基礎教育センターによる1年生対象のサポート講座は、国語60点未満（38名）、数学・英語

各50点未満（数学100名、英語56名）の学生を対象とし、2014年5月から6月にかけて各教科それぞれ2回実施した。2014年度に基礎教育センターで個別指導を受けた学生は、述べ595人（実数57人）だった。

### 3. 分析方法および各教科の分析

#### 3-1. 分析方法

国語、数学、英語の2014年度テスト結果、2015年度テスト結果のヒストグラム（縦軸：人数、横軸：5点刻み得点）を用いて、2014年度テストで下位層に集中しているサポート講座受講者や個別指導利用者が2015年度テストでどのように分布が変化したかをみる。また散布図（縦軸：2015年度テスト得点、横軸：2014年度テスト得点）は両テストを受験した学生を対象としたもので、指導による変化をみるために用いた。サポート講座受講および個別指導利用の学生をⅠ群、サポート講座受講のみの学生をⅡ群、個別指導利用のみの学生をⅢ群、講座および個別指導を利用していない学生をⅣ群で分類して示した。

さらに、各教科それぞれにおいて、領域別の正解率を2014年度テストと2015年度テストと比較し、次年度以降のサポート講座や個別指導の参考とする。

1) 中村学園大学基礎教育センター

2) 中村学園大学流通科学部

### 3-2. 国語

国語の2014年度テスト（248名受験）および2015年度テスト（155名受験）の分布をそれぞれ図1、図2に示す。2014年度テストの平均は70.7±11.73点、サポート講座受講者においては53.2±5.13点であった。2015年度テストの平均は76.1±13.25点、サポート講座受講者においては72.3±15.02点であった。サポート講座では漢字・語句の演習を繰り返し習得させていった。個別指導では文章作成力やSPI基礎の指導などを行った。サポート講座受講者や個別指導利用者を見ると、2015年度テストの結果では全体に分布した。

2014年度テストと2015年度テストの両テストを受験した学生の散布図（対象者155名、 $r=0.273$ ）を図3に示す。2014年度テストにおいて受講の有無による得点のt検定にみられた

有意差（ $p<0.001$ ）は2015年度テストにおいてみられなかった。2014年度テストと2015年度のテストの得点差は、サポート講座を受講した学生において、 $19.2\pm 15.6$ 点の向上がみられ、受講していない学生の $3.5\pm 13.6$ を上回り、t検定において有意差（ $p<0.001$ ）がみられた。よって、サポート講座の受講が学生の基礎学力に影響を与えたことが推察できる。

図4は全受験者を対象として、領域別に同一問題部分の正解率を比較したものである。平均との差によるt検定を行った結果、正解率に有意差が認められたのは領域2（ $p<0.001$ ）、領域3（ $p<0.001$ ）であった。正解率は、領域2が8.3ポイント、領域3が9.8ポイント、領域4が2.3ポイント増加している。高校時代よりも大学入学後に、レポート作成のために文章を読解・構成する機会が多いことなどが考えられる。

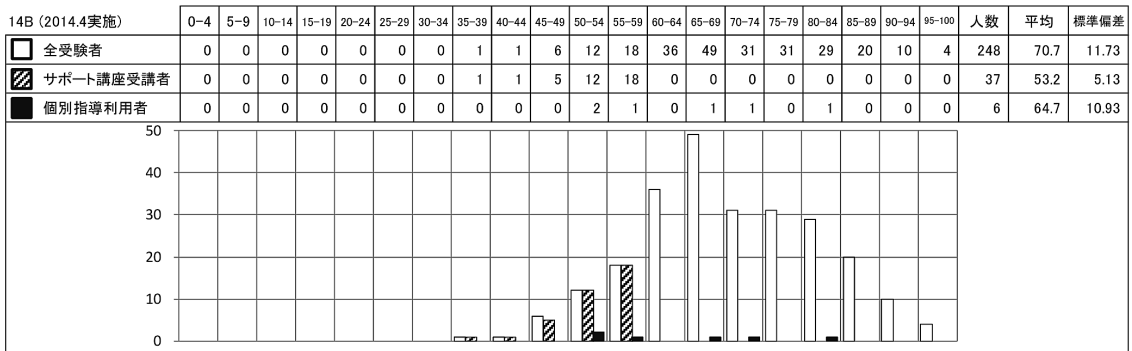


図1 国語（2014実施）

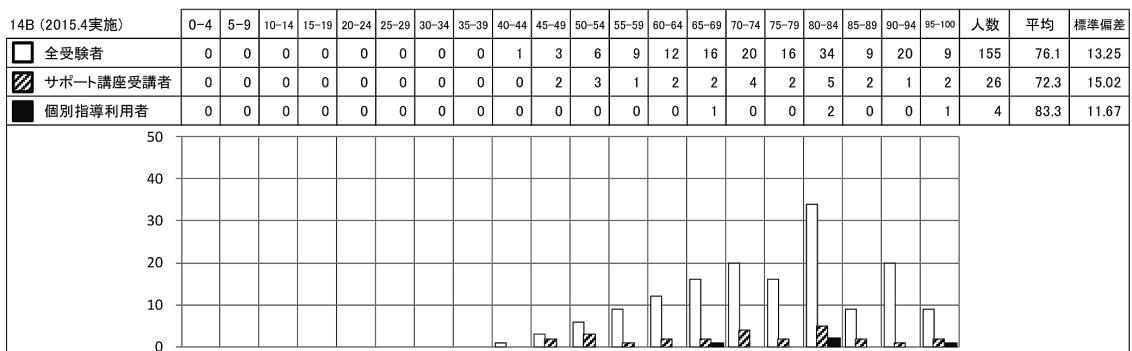


図2 国語（2015実施）

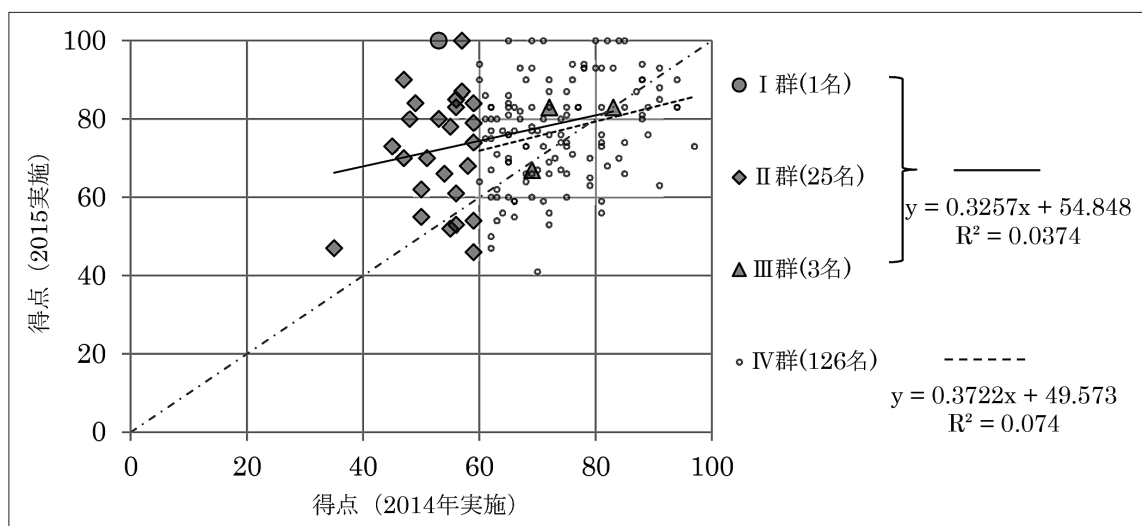


図3 2014・2015得点散布図 (国語)

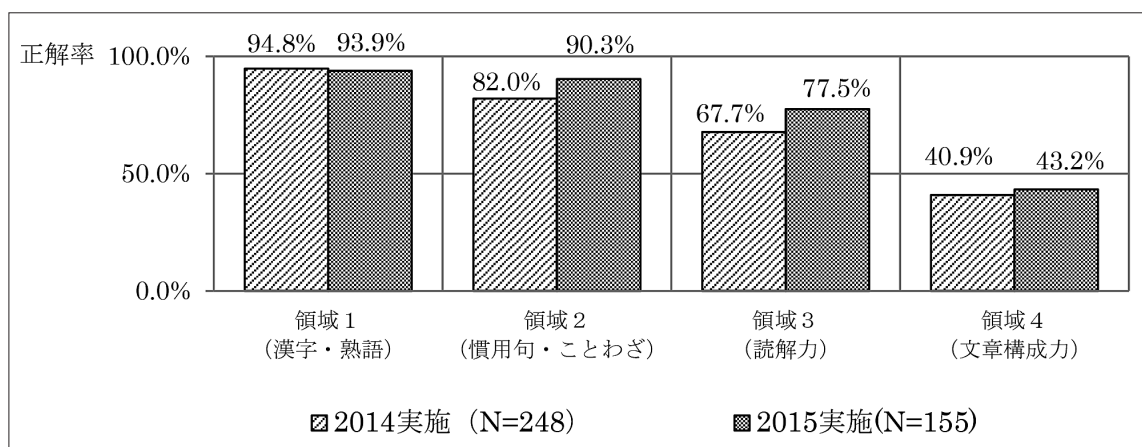


図4 2014・2015 領域別正解率 (国語)

### 3-3. 数学

数学の2014年度テスト (248名受験) および2015年度テスト (158名受験) の分布をそれぞれ図5、図6に示す。2014年度テストの平均は $55.4 \pm 21.26$ 点、サポート講座受講者においては $35.0 \pm 9.45$ 点であった。2015年度テストの平均は $51.2 \pm 17.25$ 点、サポート講座受講者においては $39.7 \pm 14.12$ 点であった。

サポート講座では算数・数学の基礎の確認テストおよび解説を行い、個別指導ではSPIを見据えた内容を中心に基礎の指導を行った。

図7は両テストを受験した学生を対象とした散布図 (対象者158名、 $r=0.732$ ) である。2014年度テストにおいて受講の有無による得点のt検定にみられた有意 ( $p<0.001$ ) は2015年度においても同様の結果だった。2014年度テストと2015年度テストの得点差は、サポート講座を受講した学生において、 $4.1 \pm 13.6$ 点の向上がみられ、受講していない学生の $-9.5 \pm 12.1$ 点を上回り、t検定において有意差 ( $p<0.001$ ) がみられた。よって、サポート講座の受講が学生の基礎学力に影響を与えたことが推察できる。

図8は全受験者を対象として、領域別に同一問題部分の正解率を比較したものである。平均との差によるt検定を行った結果、正解率に有意差が認められたのは領域3 (p<0.05)、領域

4 (p<0.001) であった。基本計算は0.3ポイント増加。文章問題は4.3ポイントが増加しており、SPIや一般常識で扱われる内容についての必要性を感じていると考えられる。

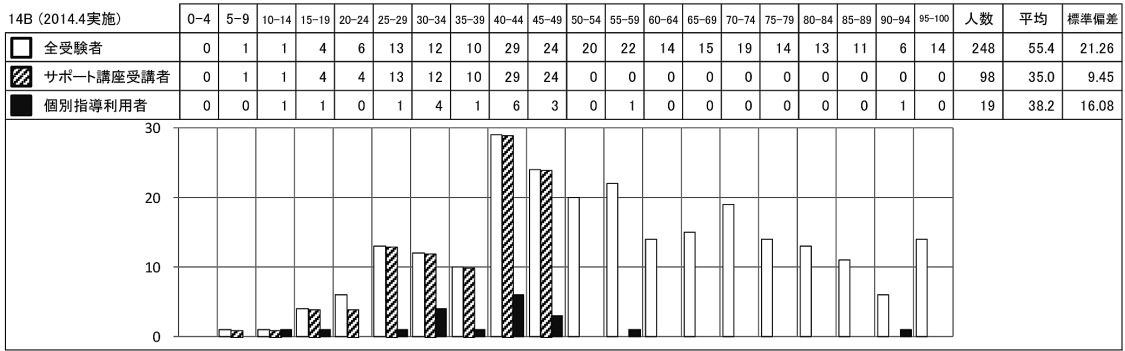


図5 数学 (2014.4実施)

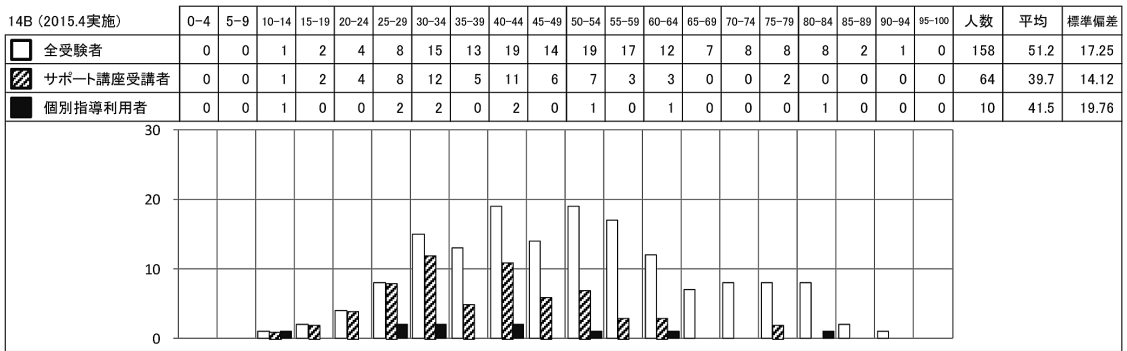


図6 数学 (2015.4実施)

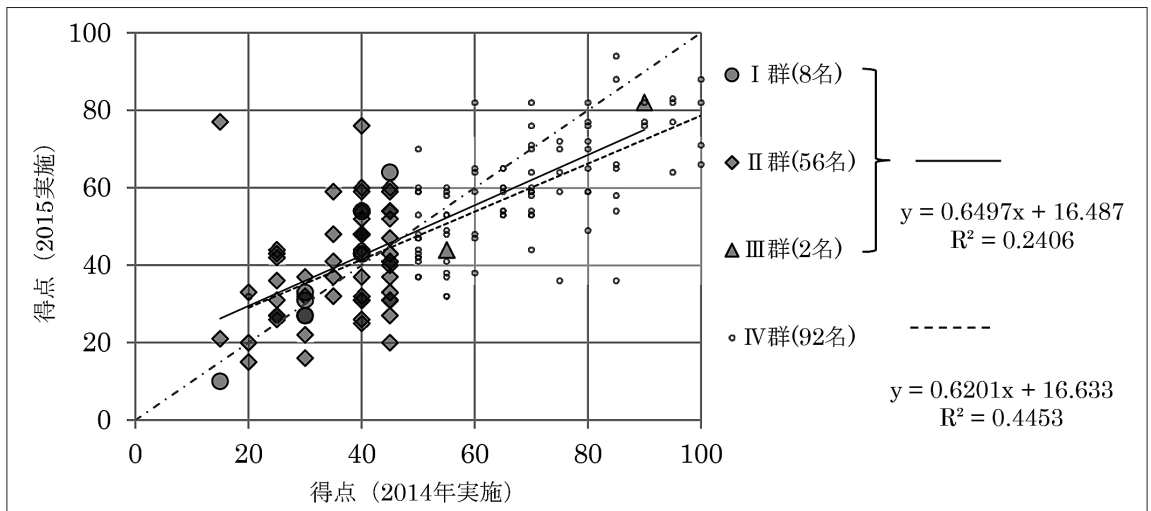


図7 2014・2015得点散布図 (数学)

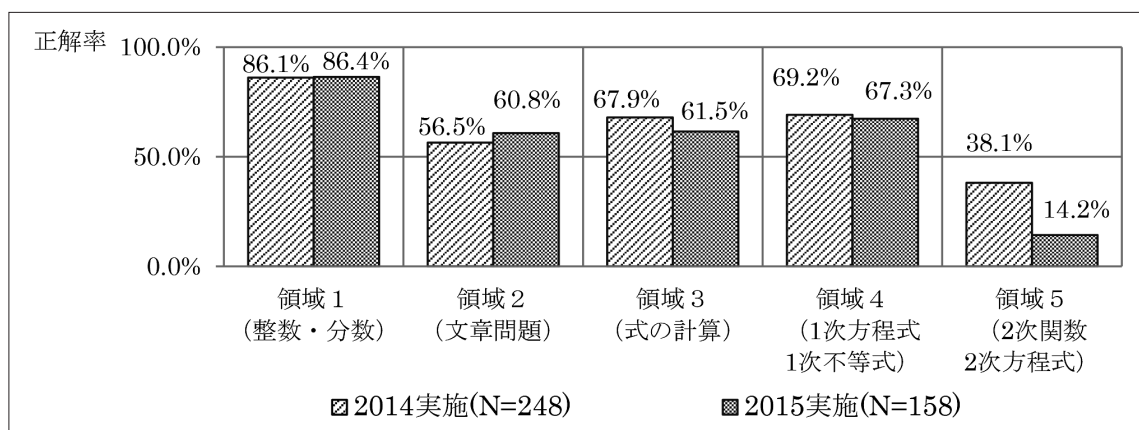


図8 2014・2015 領域別正解率 (数学)

### 3-4. 英語

2014年度テスト (248名受験) と2015年度テスト (159名受験) を比較する。サポート講座出席者および個別指導利用者のいずれも分布幅の変化が狭い。英語の2014年度テストの結果を図9に、2015年度テストの結果を図10に示す。

2014年度テストの平均は62.7±15.74点、サポート講座受講者においては41.2±7.98点であった。2015年度テストの平均は56.5±14.77点、サポート講座受講者においては43.7±11.30点であった。

サポート講座では中学から高校1年までの内容の復習を行い、個別指導では主にTOEICを見据えた基礎内容を指導した。

2014年度テストと2015年度テストの両テストを受験した学生の散布図 (対象者159名、 $r=0.649$ ) を図11に示す。2014年度テストにお

いて受講の有無による得点のt検定にみられた有意差 ( $p<0.001$ ) は2015年度テストにおいても同様の結果だった。2014年度テストと2015年度テストの得点差は、サポート講座を受講した学生において、 $2.6\pm 11.6$ 点の向上がみられ、受講していない学生の $-8.2\pm 12.2$ 点を上回り、t検定において有意差 ( $p<0.001$ ) がみられた。したがって、サポート講座の受講が学生の基礎学力に影響を与えたことが推察できる。

両テストの正解率を図12に示す。平均との差によるt検定を行った結果、正解率に有意差が認められたのは領域1 ( $p<0.001$ )、領域2 ( $p<0.001$ )、領域4 ( $p<0.001$ ) であった。次年度に向けて個別指導を含めた指導内容を検討する必要がある。

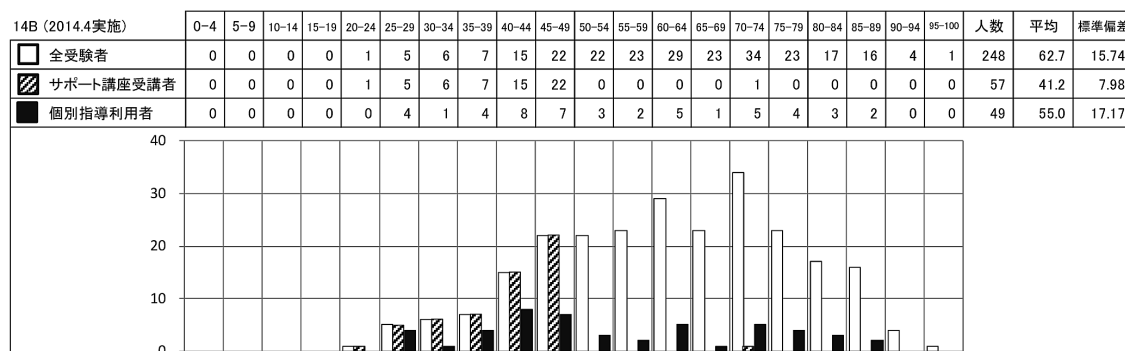


図9 英語 (2014.4実施)

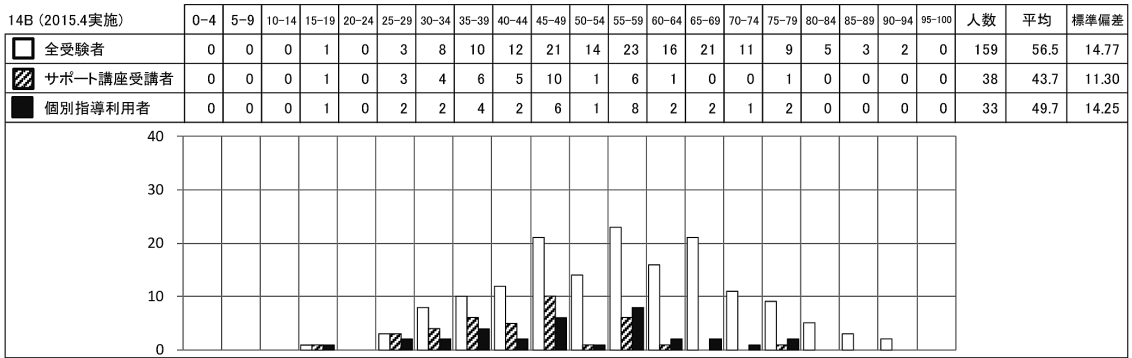


図10 英語 (2015.4実施)

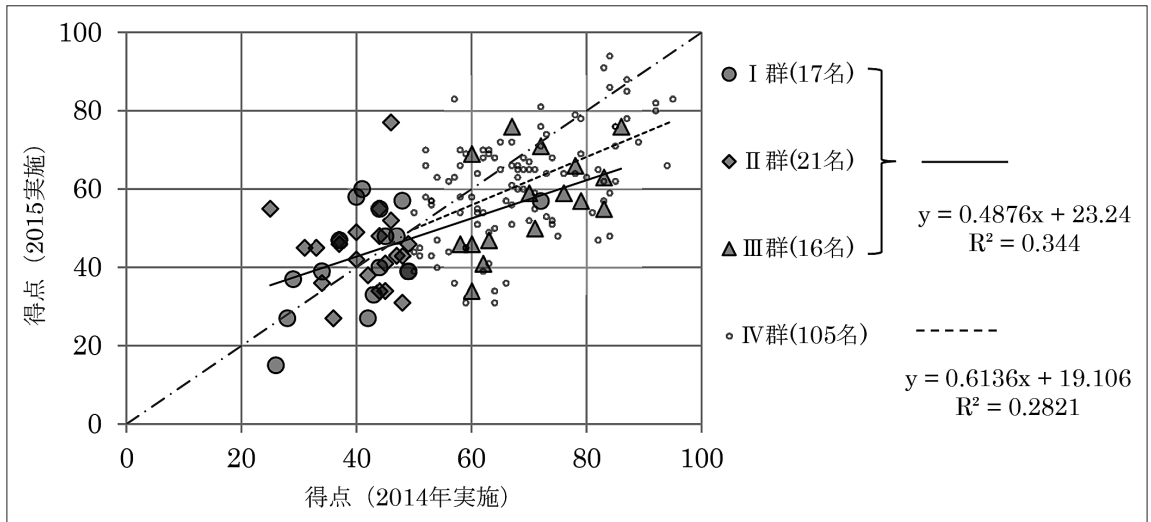


図11 2014・2015得点散布図 (英語)

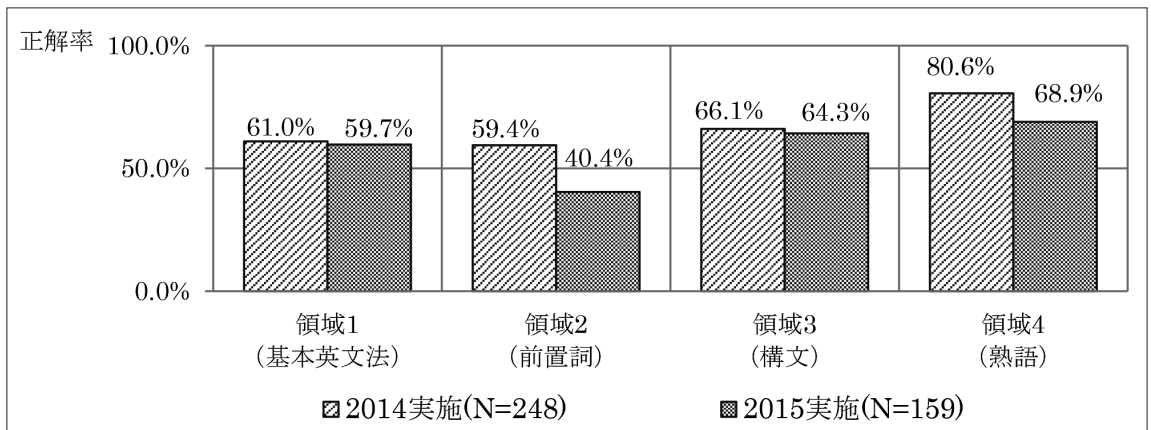


図12 2014・2015 領域別正解率 (英語)

#### 4. まとめ

流通科学部14Bの学生における、2014年度および2015年度のプレイスメント・テストの結果およびサポート講座・個別指導の効果を報告する。2014年度テストの結果では得点が低くても、サポート講座の受講によって基礎学力向上へ繋げる学生がいることが分かった。個別指導は、自主的に受けるために基礎学力が高い学生が多

く利用している結果となっている。一方、基礎学力を必要とする学生の自主的な利用は少ない。学部と基礎教育センターの連携によるシステムを作る必要があると考える。また、次年度へ向けて、プレイスメント・テストのあり方、指導方法、指導内容などを精査して学生の基礎学力向上に引き続き努める必要がある。